

# 神泉苑

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



押小路通りの発掘調査（西から）右手の森が現在の神泉苑、左は二条城。

二条城の南隣に所在する、南北約70m、東西約40mほどの大きさの池を中心とした苑池が、現在の神泉苑です。平安京の往時の姿を地表に残す数少ない遺跡として、国の史跡に指定されています。平安時代には、現状とは比較にならないほど広大な美しい苑池であったようですが、現在は1/16以下に縮小しています。

神泉苑は、延暦13年(794)に始まった平安京造営にともない、平安宮の南隣に禁苑として造られました。平安京の町割りでは、北は二条大路、南は三条大路、西は壬生大路、東は大宮大路に囲まれた、東西2町(約252m)南北4町(約516m)、計8町の敷地を占めて

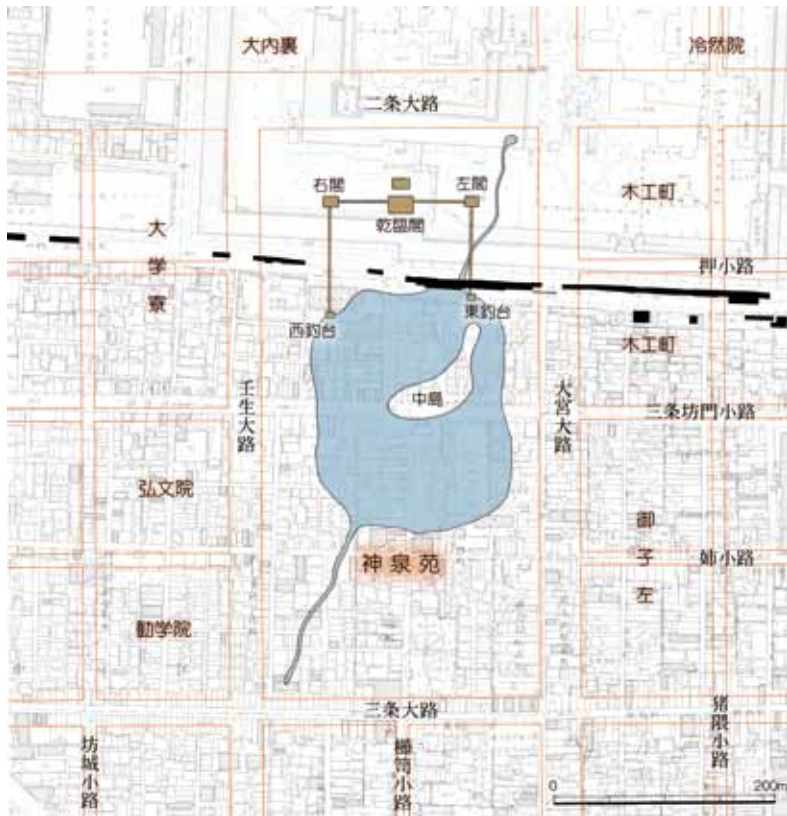
いました。全体で約13万㎡ほどの敷地面積となり、現在の仙洞御所をやや上まわる規模であり、その広大さがしのばれます。池も、現在に数倍する大きなものであったとみられています。中島のある大池を中心に林苑がめぐり、敷地北東の泉からは池に小川がそそいでいたとされています。池畔には乾臨閣を正殿として左右の楼閣や釣殿、滝殿などを配する殿舎が設けられていました。

沿革については、林屋辰三郎氏の著書『京都』(岩波新書)に詳しく、そのなかで神泉苑は「全く人工によって成ったとは考えられず、奠都以前の旧地勢を利用して荘厳を加えたものであることはうたがいな

い。」と、その成立についての見解を記しています。

文献での初見は、『日本紀略』にみられる延暦19年(800)7月19日の桓武天皇行幸の記事です。その後も天皇は、幾度となく行幸しており、続く平城・嵯峨・淳和・仁明など歴代の天皇が頻繁に神泉苑を訪れています。曲苑、詩賦や観花、七夕、重陽の節句などの年中行事、また相撲や観射など各種の行事や宴遊が、多くの貴族や歌人を集めて行なわれています。平安宮に営まれた豊楽院が、国家的儀式にともなう饗宴などの場であるならば、神泉苑は天皇の私的な宴遊の場であったといえます。

このような禁苑としての使われ



神泉苑復元想定図



神泉苑出土の緑釉瓦と文字瓦

方も、830年代の仁明朝以後は徐々に変化していきます。貞観5年(863)には、後代の祇園祭にもつながる御霊会が行なわれ、請雨(雨乞)の儀式などの記事も多くなります。10世紀代には、日照りによる池水の開放が幾度となく行なわれています。天皇の行幸は、10世紀初頭の醍醐朝で途絶し、以後は請雨経法などでの使用が中心となって霊域的な側面が強くなり、平安時代後半代には、徐々に荒廃していきます。鎌倉時代には、北条泰時による修築も行なわれますが、元の姿にもどることもなく、都市域からもはずれて鬱蒼とした幽閑の地となっていたようです。近世に入り二条城築城で、苑の北部は城内に取り込まれ、以後町屋が進出し、苑池ともに縮小して、現在にいたっています。

神泉苑推定地内の発掘調査は、

1980年代までは小規模な調査が若干行なわれていただけで、大部分の様子は明らかにはなっていませんでした。しかし、1990年から1993年にかけて、地下鉄東西線建設にともない、押小路通りで発掘調査が実施できました。線状の調査であり、調査面積も計1273㎡と、神泉苑全体に対しては1%弱にすぎませんが、貴重な資料を得ています。

この調査では、苑の西限と東限の築地跡を検出し、これによって苑の東西幅が明確となりました。苑内では、池の北岸や舟着き場とみられる遺構、北東から池に流れ込む遣水ともいえる流路、そこに架けられていた小橋の跡など、多くの遺構を検出しています。苑内からは、土器などの生活什器は少数でしたが、緑釉瓦や「神泉苑」銘入り平瓦を含む瓦類が数多く出

土しました。平安宮の大極殿や豊楽殿と同様に、乾臨閣の屋根にも緑釉瓦が葺かれていたようです。

平安時代の池の下層では、縄文時代後期から晩期の湿地及びその北岸も検出しています。神泉苑が造られた地は、平安時代以前から、自然の大池がすでに形成されており、それが縄文時代までさかのぼることが明らかとなりました。

平安京造営にあたって、この大池を禁苑として取り込むプランは、桓武天皇が遷都を決意した時点から織り込み済みであったと思われます。大池泉や林など本来の日本的な自然を基盤として形成された苑池のなかに、朱塗の柱に緑釉瓦が葺かれた中国風の殿舎が建ち、大内裏とは趣を異にした美しさを持つ空間が創り出されていたことでしょう。

(小森俊寛)